ル、サテ小便黄ニナルハ熱アルヤ、又ハ大黄ニテモ用ユレバ黄ニナレドモ、沫ハ白ク立モノ也、此證ノ小便ハ、桶ノ内ノ沸沫共ニ黄ニ見ユルモノ也、甚シキハ白紙ヲ染ムベシ、此病察色ニテ知ベシ、○中略

黄胖ト云モノ、方書ニ黄疸ニ屬シテアリ、食勞疸ノコトトモイヘリ、黄胖ハ俗語ナリトゾ、今民間ニ多ク、中人以上ニ稀ナル病ニテ、間ニハ貴人ニモ必無ト云ベカラズ、此黄胖ハ糞土ノ氣ニ感ジテ病ムト云、浮苦病或阿遠ノ病ト呼、又ゼイフクトモ呼、方言甚多シ、是ヲ脚氣ニ屬シタル書モ有、偶記ニ詳ニ論ゼリ、讀ベシ、爪甲反リテ薄ク、或摧ケテ不長、或ハ片々ニヘゲテ枯衰スルモノ其光萌也、

〔増鏡十あすか川〕春宮宇多後例にもおはしまさで日比ふれば、内のうへ山○亀御胸つぶれて、御修法やなにやとさはがせ給、和氣丹波の藥師ども氏成、はるる成、よるひるさぶらひて、御藥の事、色々につかうまつれど、たゞおなじさまにのみおはす、いかなるべき御事にかといとあさましうて、上山○亀もつとこの御方にわたらせ給て、見たてまつらせ給に、御目の中おほかた御身の色なども、ことのほかに黄にみえければ、いとあやしうて、御虎子をめしよせて御らんぜらる、紙をひたして見せらるゝに、いみじうこく出たる黄皮の色なり、いとあさましく、などかばかりの事をしり聞えざらむとて、御けしきあしければ、藥師どもいたうかしこまり色をうしなふ、かばかりになりては、御灸なくては、まが〳〵しき御事いでくべしと、をの〳〵おどろきさはぐ、いまだ例なき事は、いかゞあるべきとさだめかねらる、位にてはたゞ一たびためしありけり、春宮にてはいまださる例なかりけれど、いかゞはせんとておぼしさだむ、七にならせたまへば、さらでだに心ぐるしき御ほどなるに、まめやかにいみじとおぼす、藥師と大夫定實の君ひとりめし入て、又人もまいらず、御門○山亀の御前にて、五所ぞせさせたてまつらせ給ける、御乳母どもいとかなしと思て、いぶか